

2010年ウィンターキャンプ

■ 日程

★初日★ 体験型学習とトレーニング、バンフジュニアリーグ

★二日目★ バームクーヘン作りとバンフジュニアリーグ

昨年末から続いた寒気の影響で非常に冷え込んだ空気の中、ウィンターキャンプは愛知県豊田市の岐阜県に近い山間部にある宿泊学習施設の「旭高原 少年自然の家」にて始まりました。

■ 体験型学習（他己紹介）

施設利用のためのオリエンテーションビデオを見た後に毎回恒例となっている合宿課題の体験型学習です。今回まず始めに「他己紹介」をしました。

これは二人組みになって、相手に自分の事を全体に紹介してもらう取り組みです。大勢の前での発表は「恥ずかしいな」、「早く済ませたいよ」そんな気にもなっちゃうでしょう。大人でも多く経験が無いことですからね。しかし訓練次第で出来るようになるものですし、自己主張が当たり前の欧米では学校で昔から大勢の前で発言する授業が当たり前のように行われてきました。ここで「コミュニケーションとはどういったものか？」を体感できたのではないのでしょうか。聴衆の「聞こえないよ」「もっとゆっくりいって」との声から紹介者は一方通行のようにただ言うだけでなく、みんなに理解できるように伝えること。これが出来て初めて目的を達成することに気づけたでしょうか？

■ フットサルトレーニング

今回のトレーニングは各班に別れてから子供たちに内容をより明確に感じてもらうために各コーチはそれぞれのテーマを一貫してトレーニングしました。木村コーチはシュート関連、大島コーチはパスの準備・タイミング・力加減、永谷コーチはフィニッシュ前のコントロール・数的不均衡での判断、杉村コーチはダイレクトプレーの技術と判断でした。特にみっちり充実したトレーニングを行っていた永谷コーチにインタビューをしました。

永谷コーチのコメント トレーニングでは、ラストパスをもらう為や

シュートする前の「周りを見て判断材料を得る」ことに的を絞ってコーチングしました。攻撃の時により多く余裕が作れるポジショニング、パスをどこに出すと次の展開が自分のチームにとって有利になるのかというボールにかかわる準備への意識が高まったとバンフジュニアリーグを通して個々の変化を感じ取ることが出来ました！

■ バームクーヘン作り

二日目午前中にバーベキュー広場にて開始。仕込み、火おこし、焼き方の全てにおいて始めのコーチからの説明を聞いていないと出来ません。食材の仕込みはマーガリン・牛乳・卵・ホットケーキの素をマゼマゼ。火おこしはまず着火剤に頼らず自力で薪に火をつけることに挑戦。火が弱まる前に薪を足しつつ、うちわで空気を送る。この一連の作業は観察・分析・決断・実行というフットサルにも必要な思考工程です。微妙な加減が出来るようになったかな？焼き上げは竹の芯棒を二人で持って回しながら根気よく生地塗り・焼きを繰り返します。生地を塗りすぎて垂れたり、煙が目にしみてウサギみたいな目になったりと小さな事件がいっぱい。また役割分担による共同作業なので協力なくして完成はありません。「協力によってうまく完成できた」→ある子の「仲間と力を合わせるのがそんなに必要なんだと思った」という言葉が連携の効果に対する気づきを表していました。



■ バンフジュニアリーグ

夏に続いて第二回の大会形式の試合です。成績のつけ方は個人勝ち点方式で、勝利チームのメンバーにそれぞれ勝ち点3、引き分けに勝ち点1が加算され、負けは0点です。

合宿のメインイベントであり、みんなの大好きな試合でリーグ戦を大舞台ととらえる子もいることでしょう。合宿開始からコーチ陣はリーグ戦についての質問を多く受け、皆で同じ事をするということは、それまで共通点が無かった人同士でもおしゃべりのコミュニケーションツールが増える。そんな側面もあるんだなぁと感じました。

ゲームの様子は、普段のレッスン中の試合より厳しく競り合い、一球一球に勝ちたい気持ちが気迫となって表れ、「こんなにあきらめずに粘れるんだ」そんなたくましくなっていく瞬間が垣間見えます。始めたばかりの時期にはフットサルの全体像が把握できず、



何をしたらいいかわからない心境でしょう。それから来る「消極的になってしまうプレー」からの芽生え・脱皮が本気の競い合いにはあります。

こんな話を聞いたことがあります。。。「海外では練習中のゲームでもガッツポーズをする。」どういう意味かという、モチベーションにおいて試合と練習の境界線が無く、いつも本気・全力でハードワークしてしのぎ合っている。真剣勝負で点を取る、活躍することは相手が全力で対応してくるからこそ、その勝利の価値があるのです。



今回のリーグ戦の上位三人までの入賞賞品は、名古屋オーシャンズの選手のサイン入りフットサルボール、惜しくも入賞できなかった「頑張ったで賞」は名古屋オーシャンズの選手のサイン色紙でした。(写真は低学年の部入賞の三人)

■ 合宿課題

合宿を「学宿」に高めるべくプリント課題のテーマは「自己の評価」です。自分のプレーの自己評価と客観的評価から気づきを得る事を目的に作成しました。「人は自分の中にある情報を一度言葉や文章で出すことによって認識が深まる」人からの意見を聞いて気づかされるだけでなく、なんとなく思っていた事が会話を通して本当の自分の気持ちに気づかされたりするものですよね。

少しですが子供たちの代表例をご紹介します。



■ お友達の評価から発見したことは？(友達からの自分の評価を聞く項)

「自分で思っていることと友達が思っていることは違うんだなと思った。」・「シュートをはやく打てていたところを良く観ていてくれた。」・「ありがたい。(ボールコントロールが上手に)出来ているとは思わなかった。コントロールを使いたいと思う。」

傾向として自分が思ってもみない自分のいいプレーを認められ、それが自分の強みと認識し積極的に取り組み始める後押しとなっていました。

■ 合宿で感じたこと、気づいたことは？

「ミスした時励ましてもらってうれしかった。」・「皆と協力してやれば出来ると思った」

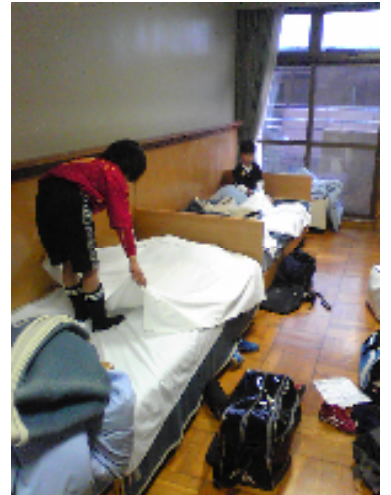
「仲間が必要なこと」・「料理って大変なんだな」

傾向としてチームワーク、自分のプレーに対する課題点、合宿の実感など個性の出るものでした。

締めくくりとして「合宿から帰って、今後の目標」を立ててもらいました。達成までの期間設定や、プレーの継続回数やパーセンテージで達成度を測りやすくするなど目標の型となる設定方法を盛り込みました。プリント課題では、なんとなく過ごしたり、頑張った後にやりっ放しではなく、振り返る習慣の効果を知る、身につけるきっかけとなって自分の努力を信じれる子になっていてもらいたい！そんな願いを込めました。コーチの合宿においてうれしい発見は、プリントの目標設定を書く時点で既に次の春合宿に行くことに決めている子が多いたことでした。

■ 編集後記

プリントの**パンフ Jリーグが終って新しく練習が必要だなと思ったことは?**の項で意図せず多く出てきた事は、「逆足のシュート」でした。試合中に利き足でない足で蹴る能力があればシュートチャンスがあった。それを自身で感じた事を意味します。これはサッカーにおいてはトップにより近いハイレベルの試合に出て自分自身で体感しないと感じられない守備の圧力だと思います。欧州のサッカーでは得意を伸ばすことが育成分野でのコーチング哲学の主流で、過去の日本の育成では苦手を克服するマイナス採点方式のスポイルしてしまうコーチングが主流だった気がします。「スポイル:甘やかして相手をだめにしたり、気持ちを傷つけてすっかりやる気をなくさせたりすること」つまり、過度の戒めやおせっかいな声かけによって子供のやる気を奪ってしまう。育成には人間性の教育的側面もありますが、結果と過程の両方を望み過ぎるとこうなってしまうのかも知れません。



目的を達成するためにどうすべきか、何が出来るのか。勉強でもそうですが、人間は強要されると嫌になるものです。自分で感じ、



答えを見つけられる環境で自然に導きを得る。そんな環境を作り出すフットサルとコーチング。「克服」とは自分で向き合う事に意味があるのかもしれませんがね。執筆していてまた改めてフットボールの奥深さを学ばせてもらいました。

「この子はこういうプレーも出来るんだ。」いつもと違う対戦相手との対峙によって引き出される新しい一面の発見。今回も私の受け持ちのレッスン生は合宿から帰って最初のレッスンでは球際で競り合いの粘りが身について密かに感動しました。子供って大人に感動を与えてくれる存在ですね。

文章・編集 大島裕樹(大府・岩倉校担当コーチ)